

向笠良一先生の功績をふりかえる 吉井 清文

向笠良一先生（1923年5月1日神奈川県生・2004年11月11日逝去・82歳）は、労働総研創立での発起人の一人でした。その生涯は大学教員・研究者（1949～87年の37年間大阪市立大学・1987年名誉教授、いご12年間大阪経済法科大学・計49年間）としての面と、労働組合運動・労働者教育運動での調査・研究・講師活動としての面の、二つの流れから成っていました（趣味は将棋とクラシック音楽）。「科学の原理を貫こうとする強い傾向」が、共に歩んだ人達の共通の感慨です。この一文は「教え子」かつ共同者としてのわたしの簡単な思い出です。

1、向笠先生は、1949年に戦前の自由な学風・1943年の「商大事件」（治安維持法による教授・学生運動弾圧）が特徴の大阪商科大学を終えてすぐに、政治運動での調査活動に入りました。若手研究者のチーフでした。この種の活動が生涯の特徴になりました（わたし自身が大学2年生で受けた「空想から科学へ」の外書講読講義は、綿密な労働者状態の分析との結合による説得力で、私の人生を一変させました）。1962～3年の大阪府下衛星都市職員労働組合（衛都連）の行動綱領作成活動で、先生は1万人の労働者状態調査・総括を担当しました。以降、先生の綿密さに辟易する労働者さえでたことがあります。

1981年のフランス留学では、パリ第一大学「労働経済ゼミ」（指導教授アンリ・バルトリ氏）で、4回の「日本問題」講義を行いました。1年をかけた事前の労働者調査の紹介が軸でした。バルトリ氏が最も熱心にメモをとったそうです。大学研究誌に執筆・掲載されましたが、翻訳では仏ジャーナリストに援助を依頼しました。先生はパリ滞在中、一方で第二次大戦中の「パリ市解放委員会議長」であったアンドレ・トレ氏夫妻の厚遇をうけ、他方で「シトロエン」企業労働者のヒヤリングを行い、日本の長

時間労働が当社に「輸入」、昼休みが30分に圧縮されている実態をつかみ、日本の労働者に紹介しました（5年後にCGT＝労働総同盟の活動の結果、シトロエン労働者の大勢がこれに対決し、2時間への回復に成功）。パリ大学での講義は「労働運動」誌（1983年1月号）に掲載されました。

2、戦後労働組合運動の高揚期、先生の活動はフル回転でした。理論上の軸は「合理化」論と国有化論でした。1969～70年の堀江正規責任編集「論集・労働組合運動の理論」第三巻の「合理化論」、第七巻の「国有化論」はそのエキスです。この論文にはいま労働組合と学習運動の両面から、論集全体とあわせて強い共感と、再学習の必要を訴える評価がでています。この研究成果が基礎になって、1971～74年の「労働農民運動」誌主催の「夏の労働学校」で4回連続での講義になりました。1979～86年には「名村造船指名解雇撤回闘争裁判」での依頼で、先生は「合理化」問題の意見表明を行い、解雇撤回・全員職場復帰という希有の大勝利に貢献しています。造船不況説の不当性が説得力をもって反駁されました。面目躍如でした（労働学校や労働組合学習会での先生の講義は、科学的分析の深さ・整然さが一貫した特徴でした。ゼミ生は100%主義者と評しています）。

3、向笠先生のもう一つの領域は「資本論」世界でした。大学での講義への反映、労働組合講座での講義への「資本論」研究成果の反映、関西勤労者教育協会「資本論」講座講師団への参加、「資本論」普及の執筆活動などです。1974年に「労働農民運動」誌は『「資本論」と労働者』連載講座を3名の筆者で掲載しましたが、先生は剰余価値論の軸の絶対的剰余価値と相対的剰余価値部分を4回分担当しました。この掲載では、その全体を切り離して一冊にまとめて学習文献にする労働者が多くでました。

（よしい きよふみ・会員）